

# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311



教祖120年祭を目指し、  
道の後継者の育成を念頭に邁進しよう。

# 自ら求めて

## をやの思いに応える歩みを

秋季大祭講話 世話人 島村廣義先生

### 秋季大祭の意義

秋の大祭は、立教の元一日を祈念してつとめるお祭りです。「世界一列をたすけるために天降った」と仰る立教の本旨を心に治め、それに応える道を心定めするのが、その意義だと思います。

立教の元一日、中山家のお三方の身上を台にお願いされたとき、「我は元の神・実の神である。世界一列つをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。」とのお言葉があった。中山家では強く辞退されるも、親神様が厳として退かれず、教祖のお姿を見るに見かねた夫・善兵衛様が心を定め、一身一家の都合を捨てて仰せに従う旨を答えられた。ここに本教が始まり、世界一列をたすけるために教祖が神のやしろと定まりました。

このひながたを、私たちの入信の元一日に置き換えて思案すると、身上事情から親神様の思召に触れ、たすけ一条の道具として見定められてお引き出しをいただく。このことが、立教の元一日に合わせて、考えることだと思います。

私たちは神様からたすけ一条のためにお引き出

していただいたよぶべく、だということです。

身上をたすけていただくことは小恩。この小恩を台にして、親神様の十全の守護(大恩)を心に治め、報恩の道を歩むことこそ、お道を信仰することの意味だと思います。

秋季大祭の意味は、それぞれが、入信の元一日、親神様にお引き寄せいただいたことに思いを致し、立教の元一日に思いを馳せて、お引き出さる親神様と道具衆としてお使いいただく教祖との思いに応えるべく立ち働こうという決心も新たに、たすけ一条をお誓いします。

### 教祖年祭の元一日

このたび『諭達第二号』が發布され、教祖百二十年祭に向かう親の心を御披瀝になります。教祖年祭の元一日について改めて思案しましょう。二十六日というは、始めた理と、治まりた理と、理は一つ。 明29.2.29

というお言葉があります。「始めた理」というのは立教の元一日で、「治まりた理」というのは教祖年祭の元一日ですが、世界一列をたすけるために天降った親心と、私たちの成人を促すために二十五年先の定命を縮められた親心、これは、子供かわいい一条の親心に尽きるわけです。

教祖が、お姿を隠され、扉を開いて世界ろくご

に踏みならしにいられたその元一日は、教祖がつとめの勤修を急ぎ込まれる中、理の上からは分かたなくても、教祖の御身を思うばかりにつとめ切れぬその当時の先生方の「心痛を思案するは、自ら成人しようとする積極的な姿を求められている」と思われます。親に甘えることなく、ひながたを抛り所に、自らが求めて、たすけ一条の御用の上に積極的に向き成人の足どりを進めていくことを求められています。

### 教祖年祭の意義

この明治二十年の節は、唐突に現われてきたのではなく、その十三年前、明治七年のおふでさきに、予言されています。

十一に九がなくなりてしんわすれ

正月廿六日をまつ

三三 73

このあいだしんもつきくるよくハすれ

にんぢうそろふてつとめこじらえ 三三 74

その当時、このおうたの意味はなかなか想像できなかつたことですが、このことは後日、次のおさじびで分かることとなります。

さあさあ正月二十六日と筆に付けて置いて始め掛けの理を見よ。さあさあまた正月二十六日より社の扉を開き世界ろくごに踏み均しに出て始め掛けの理と、さあさあ取り払うと言われてした理と、二つ合わして理を聞き分け

ばさあさあ理は鮮やかと分かるやろう  
明22. 3. 10

教祖の五十年のひながたの中で、この明治七年はどういう年だったか思索してみると、この頃が執筆になったおふでさきの中に、急ぎに急がれる親神様の思召のほどを記され、重大な時間が迫っていることを告げて、強く人々の心の成人を促されています。

まず、道をおさめる真柱を早く定めるよう記され、また、前川杏助様に作らせていたかぐら面が出来てお迎えに行かれる期日も予め記されて、その月の二十六日からお面を付けてかぐらづとめがつとめられました。

かかる中、大和神社の一件、山村御殿の節で高山布教に出られるとともに、官憲の迫害がいよいよ厳しくなり、弾圧が続いていきました。教祖は、御自らは赤衣を召されて月日のゆるいでおわすことを目の当たりに示され、そのお召し下ろしをお守りとしてお下げ渡しになるとともに、たすけ一条の道としてのおつとめの模様立てを整えられ、合わせて、おさづけの理をも渡されるようになって、つとめとさづけというたすけ一条の道をはつきりと示されて、世界だすけへと、積極的に歩み出されました。そして、お屋敷の人々の心の置き所を示されるときにも、明けて明治八年には、かふるだいのづば定めをされて、たすけの根元を証されました。

つとめの模様立てを整えられて、積極的なたす

け一条の活動を促されているのがこの明治七年八年の年です。そして迎えた明治二十年、

これまでに言った事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としつかり見て居よ。

明20. 2. 18

まさしくこのお言葉通り、この節を境にして、広く一般におさづけの理を渡されるようにもなり、また、土地処に拠り所として教会名称を許されて、積極的なたすけ一条の道を進められました。更にこのお言葉を載いて発誓した先人達の真実が、遼原に火を放つがごとく伸び広がり、今日の道の礎が築かれました。

これらの一連の出来事、また、明治七年、教祖ご自身の積極的なお取り組みと時を同じくして明治二十年の節を予言されたことを思索すると、年祭の元日は、求められる親心に対する成人の鈍さ故に起こった節というだけではなく、自らが積極的に求めてたすけ一条に動しむ姿を神様が求められている、そのことを思わずにはおれません。

ならばこそ百十年祭のときも、前真柱様が、百十年祭をつとめるべきか否かと直属教会長に宿題を投げかけられました。つとめなくていいというお心ではなく、教祖の年祭は、どうでもこうでも私たちの側からつとめさせてもらわずにはおれないというもので、それも、求められる成人の実を

もって、お応えする、これが教祖の年祭です。

おぢばや大教会から、教祖年祭活動を打ち出されたからするというのではなく、積極的に自ら成人を求めて歩ませてもらい、その実をもって教祖にお喜びいただく、つとめずにはおれないというのが教祖年祭であって、人間の故人を偲んでつとめる年祭とは違う、ここをしつかり心に治めなければなりません。

### 教祖を身近に

教祖が、存命で、世界の隅々に先回りして働かれ、私たちの行く末を守っておられることを心に治めるとともに、それにお応えできるような私たちの成人の歩み姿を思索しなければなりません。

お姿は見えませんが、みんな教祖が存命にておわすということを、どれだけ肌で感じて、日々教祖に御礼を申し上げて通っているでしょうか。

真柱様は「日々々に教えに基づく生き方」と仰っています。教祖が存命でおわすということをしつかりと心に治めることが、おふぼく、お互いに求められている一番大切な点だと思います。

今日、教祖殿では、本当に現身あるときと同様に、教祖に仕えておられますが、また逆に、教祖が扉を開いて、世界の隅々にまで出られて、たすけ一条の上に働かれているということをも、合わせてしつかり思索させていただきたいのです。

お喜びいただけるように

教祖から、たすけ一条の道筋として、つとめとさづけとを明かされていますが、おつとめについては、五十年のひながたの中でその完修を急ぎ込まれ、二十五年の先の定命を縮めて現身を隠されたことからは、おさづけの理と教会名称が許されるようになりました。

教会は、私たちの初代が、たすけ一条を心定めし、「ご恩報じの道としてその設立を願い出たのですが、その教会は、おつとめをもって土地処の陽気ぐらしを願い、教会から出でては、しっかりと御教えを伝え、頂戴したおさづけを取り次いで、一人でも多くの人に親神様の思召を伝えるということ、それがその使命です。

そういうところから、お互い、教会に繋がるよふばくとしては、教祖に一番喜んでいただく道として、親の懐に飛び込んで行き、それぞれが、望まれるような成人の実を上げること、年祭活動はこのことに尽きると思います。

お互いに、自分の通り方を振り返り、日々教えに基づき生き方をただけしているかを反省してみ、よふばくとして、また、立場によっては会長として、どれだけたすけ一条の御用の上に自分の身を尽くし運んでいるでしょうか。

このことが、自らの成人を御守護いただくと同じに、私たちの身の回りの人々と共に、成人へと

導かれる元となると思案します。

常日頃から掛けて、親神様・教祖のお心に添うことはもちろんですが、特に年祭活動は、その中であって、年祭ならばこそという一つの仕切り(仕切根性・仕切知恵・仕切力)をもって、普段の歩みとはまた違った、一歩歩みを早めた成人を、互いに誓い合いたいものです。そして、その実をもって教祖にお喜びいただきたい、これが年祭活動だと思えます。

それぞれに、教祖の年祭に対して色々にご思案しておられると思いますが、『諭達第二号』をまつてお打ち出しただく親のお心にお応えできるよう、親の声を丸ごと受けて、年祭活動に取り組みその心を定め、自分の年祭活動はこれだとしつかり性根を定めて、その理を受けていただきたい。そのことを切に望み、年祭活動に勇んでつとめたいと存じます。

《以上要約》

本部青年会総会

一年に一度、青年会長様であられる真柱様より、直々に青年会員に向けてお言葉を下さる日、それが本部青年会総会なのです。

我々笠岡分会の委員会では、一人でも多くの会員さんに本部青年会総会にお帰り頂き、青年会長

さまよりのお言葉を、紙面などを通じてではなく、直接お聞き取り頂きたいと思ひまして、総会参加を呼びかけて参りました。

葉書を通じて、又直接会員さん宅に出向いてお誘いする等、方法は様々でありましたが、本年は当日が日曜日ということで例年よりも多くの方にお集まり頂けたと思います。

総会の前夜、話所の一室をお借りして、ささやかな懇親会を催しました。話に花が咲き、明け方まで語り合っていた方もおられたようです。

当日、青年会長様のお言葉をこれから一年間の信仰指針とすべく、こころして臨みましたが、個人的には、真柱様のお言葉の中の「青年会員は元気がとり得」というような意味の表現が耳に残りました。

振り返れば今年の笠岡分会の活動は無計画かつ無鉄砲な展開を繰り広げて参りましたが、来年は真柱様のお言葉を胸に、元気に勇んで活動に取り組みつつ、つつしみのある節度を保った姿勢で臨みたいと思っております。

どうぞ今後とも青年会活動の上に、ご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

尚、今年の総会前夜祭において、笠岡分会の出席が無かったことは、某委員長が模擬店出店の為の抽選会に、時間を間違えて、出席しなかったからであるということも、本年の本部総会に関する特筆すべき事柄であると存じます。

(笠岡分会委員長 佐藤 真孝)

## 第七回グループホーム

### 国際サミットに 雅鶯会が出演

グループホームサミットとは、痴呆症の治療や、介護の研究者、施設の長などが全国から集まり、福祉先進国のスエーデンのドクターたちと研究の成果など、最新の情報を交換し合うシンポジウムです。

去る十月十六日から十八日までの三日間、笠岡市で国際サミットが開催され、国内外から三百名の関係者が集まりました。笠岡市は福祉施設の人口密度が全国一であるところから国際サミットが開催されたものです。最終日の十八日は、岡山西ゴルフ倶楽部(井原市)のホールに於て、市長主催のパーティが開催されました。市では外国人の人々にも喜ばれるイベントの演じ物として、選ばれたのが雅楽でした。要請を受けた雅鶯会では演奏前に英文の雅楽紹介のプリントを配り、十六名のメンバーで平調音取、越殿楽、陪臚を一手一つに演奏し歓迎の意を表しました。

外国の方は勿論のこと、国内の人々も雅楽という古典音楽に接するのは初めてのこととて、会場内からは感動の盛大な拍手がホール全体に響きわたりました。

# 雅鶯会 二題



去る五月、市文化連盟に加盟して以来、絶え間なく出演依頼があり、嬉しい悲鳴をあげています。が、教祖百二十年祭を前に大きなをいげけになるものと、今後の活動にも張り切って頑張りたいと思っております。

## 笠岡市芸能祭に初出演

「文化の日」の十一月三日。午後一時から笠岡

市民会館大ホールで開催された「芸能祭」は、笠岡市最大の文化行事として、長年続けられている。

雅鶯会は、数年前から、この催しに参加を申請しており、市民の方々に広くにをいげけしたいと願って来たが、笠岡市制五十周年を記念する今年の大芸能祭で、その願いがやっと叶いました。

午後一時、舞台の幕が上がると、すでに朱色の欄干に囲まれた、十四人の雅鶯会員が整列している姿が現われ、その状態のまま、舞台上に上がった安藤一泉文化連盟会長の挨拶が行われ、会長が下がられると、プログラム一番の「雅楽」が、芸能祭初出演ながら、市民も驚く見事な演奏を披露して、立派に開幕を飾ることが出来た。

一般の人の耳にも、婚礼などで馴染みのある平調「越殿楽」(黒田節のメロディの原型)と陪臚の二曲を奏し、客席から初めて目の前にする楽服の姿と古典音楽の調べに、溜め息まじりの感嘆の拍手が、惜しみなく送られた。

楽人は、十四人、井原・福山・鴨方・府中市方面や九州からの人々もあり、朝九時三十分には大教会に集まって、「音合せ」や準備を行い、昼食を頂いて正午に会館へ向かった。

箏 … 片岡道雄、鞆鼓 … 猪原啓文、太鼓 … 原 公彦、  
鉦鼓 … 今川昌彦、笙 … 藤井正仁、掛谷宣和、

箏 … 北川治史・森本重吉、猪原啓文・森本 勇、  
龍笛 … 渡辺孝信・枝廣隆文・渡辺和善・森本清伸。

(順不同)

(事前相談準備) 引率 森 本 忠 平)

高屋分教会

# 創立110周年記念祭執行

— 教祖120年祭に向け重き歩みを誓い合う —



高屋分教会(武内正美会長)は11月17日、大教会長様ご夫妻、前奥様、来賓として門脇誠教島根分教会前会長様、田中隆之福山分教会長様を迎え、創立110周年記念祭を盛大に執り行った。当日は晴天に恵まれおよそ900余人のよふぼく、信者が参集。神殿外にも5ヶ所の参拝場が仮設され、各所にモニターテレビを設置。祭典の様子が中継された。同教会では、記念祭に向け「おつとめを完修し、陽気あふれる教会にしよう」を本年のスローガンに、そ

の実践項目として、人材の育成に重点を置かせて頂くこと。と①人づくり②おつとめ奉仕者の育成③道の後継者の育成④教会長の成人——を打ち出し歩みを進めた。その間、神殿・付属建物ふしんの発表、祭典おつとめ奉仕者として全部内教会長、全直轄教会長夫人の婦人役員任命など、おつとめ完修と教会内容充実を図り、月次祭の前日にはおつとめ練習を行ってきた。

当日、大教会長

様は礼拝の後、

「110年とい

う歩みは

数字の上

からみれ

ばたか

が、高屋

の道に係

わった一人一

人の心がばらばら

でなく親神様、教祖のお

つながら、真実のふせ込み、理づくりがあつたか

らの110年だと考えれば重い110年だ。110という数字

を軽く考えないで、これからの歩みを重くして欲

しい。にをいかけ、おたすけは真実に人をたすけ

る心にならせて頂くための歩みである。教祖120年

祭のご発表があり『諭達第二号』のご発表を頂い

た。年祭への歩みをより重くするには今日参拝さ



れた方々が、我身のこ  
とだけでなく少しでも  
世界一れつをたすけた  
いと親神様の思いを  
我思いとして、たすけ  
一条の道を三年千日歩  
んでいく心を定めるの  
が今日の日の大切な角  
目である」と話された。

おつとめの後、武内

会長は大教会長様に、「本日頂いたお言葉を胸

に、次の塚目指して重き道をしっかりと歩

ませて頂きます」と決意を申し上げ、続い

て参拝者に、「110年の道中には幾多の節も

あつたが親神様、教祖のご守護、大教会の

親心、先人達のふせ込み、皆様方の真実を

頂き今日の姿をお見せ頂いた。年限にふさ

わしい形のふしんをと、将来の神殿ふしんに

つながら付属棟のふしんを始めさせて頂くこと

になった。高屋一手一つとなって倍に倍の心をもつ

てつとめさせて頂きたい」と奮起を促した。

祭典後、駐車場に設けられた模擬店、ゲームコー

ナーがオープン。神殿内ではバンド、雅楽、鼓笛

隊の演奏、お祝い芸、福引きなどのアトラクショ

ンが行われ、フィナーレは大教会長様ご夫妻をは

じめ参拝者全員で「明日があるさ」の替え歌に

をいかけに行きましょう」を大合唱、教祖120年祭

に向けて更なる重き歩みを誓い合った。



# 談話室



## 親心の有難さ

油木分教会長 黒瀬修式

結構な暮しの中で文明の進歩よろしく、更にはその域を超え過激な進行は止む事もなく、人々は、真からの喜びや楽しさを味わう間もなく過ぎ行く日々、心の安らぎを求めてあえいで居ます。

用木の使命は益々重要極まる中、教会長の立場上、自らの日々の在り方を見つめては、時として、これで良いだろうかと過剰な反省の為に、進む道に心の淋しさに陥る時もあり、ここで心を倒したら止ってしまうので愚案を止めて、においげに、おさづけの取次に、ひのきしんに、身をもつての行動に出させて頂くのであるが、そんな時は心の勇みは少なく、作り出す元気を持つての行動となる。その結果は大抵の場合、心が軽くなり良かったなと安堵の境地。

そんな中、落込みの最たる日の事、こんな状態ではと思えども他に手はなく戸別訪問においげに強引に出かけた。

又、天理教と云った途端に丁寧な態度になって、差し上げた書物も丁寧に受け取り、双方の和みとなる。留守宅へは、家毎に拜しては書物を届けさせて頂いて、歩く中にふと心中に広がる安堵感に気づいて、ついホロリ

ああおやさまありがと(う)げ(う)ます

暗雲転じて晴天の境地誠に嬉しく、貴重な此の日を忘れぬ様に、遅れ勝ちな成人への反省も明るく、本物の勇み心の元になるつとめに徹し、御存命の教祖を見失わぬ様、日々の努力を楽しみと心得て、今日も頑張らせて頂いて居ります。

世の諺に、「棒程願って、針程叶う。」と云うのがありますが、実はこの反対で、子供可愛い一条の親神様の事、針程の誠も、棒程に受け取り充分な御守護を下さってあるのだと思ひ、有難く申し訳なく大きな親心を感じて、少し心が開け元気を頂きました。

何ほ小さな誠でも成人到らず、苦の誠でも親心を足して充分に御受け取り下されてある誠に有難い親ならばこそ、喜びは真似も受取る親心。

かの人に「真似でいいのですよ。」と申し上げたら、「真似でもよろしいのでしたら私

にもできそうです。」と、その笑顔は晴れやかに美しく見えました。

心の狭い反省の仕方は自他共に勇まれず、明るくお創り頂いた世界では、明るさで開け、繁栄して行けるものでありましよう。

おやさまは「声は肥やで。」とお教え下さいます。人の心の肥となる言葉であれば、たとえ成人無くとも同様にお受け取り下さり、言葉通りの結構をお見せ頂けると教わり、意識して使わせて頂く肥の言葉のつもりが、肥でなく私語の乱言になり、慌てて言い直ししながらも、常に結構に御護り頂いて居る事の有難さ、忝なく御礼申し上げて居ります。

# 12月

みんなそろって  
ひのきしん  
献血ひのきしん  
21日  
年末大掃除  
22日  
詰所餅搗  
27日

# 秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます親神様には泥海の混沌たる様を味気なく思召され人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思惑のまゝに「うを」と「み」を始め次々とお引き寄せになり雛形と道具を定め守護を教へ八千八度の生まれ変わりを経て人間とこの世をお造りになられ天然自然の理でお育て下されたばかりでなく約束の年限の到来と共に教祖をぢばに引き寄せ月日の社とお定めになった上陽気ぐらしへ向かうこれのたすけ一条の道をお付け下された事は誠に有難く勿体ない極みでございます 身上事情を通してお引き寄せ頂いた私共お互いは貨物借物のお礼はもとより親心とひながたを胸に日夜お礼申し上げつつ届かぬ乍らもたすけ一条の上に邁進させて頂いております その中にもこの月二十六日は親神様が初めてこの世の表にお現れになり最後の教えである万いさいの真実を明かされ陽気ぐらしへとお導き下されている元一日の日柄でございますのでおぢばでは秋の大祭が執り行われますがこの名称にても今日の吉日に理のお許しを戴いて只今からおつとめ奉仕者一同立教の元一日の世界一列救けたいとの親心に思いを致し反省と決意を胸にたすけ心一杯に陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて秋の大祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日お待ちわび寄り集いました理に繋がる道の子供達が相共にお歌を唱和し同じ思いに伏し拝む状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいます様お願い申し上げます

又本日はおぢばより世話人島村廣義先生の御入込みを頂いておりますので後程教祖百二十年祭に向けての時句のお話を聞かせて頂きます お聞かせ頂く一つ一つを心に治めて勇躍百二十年祭に向け成人の歩みを進めさせて頂く所存でございます 更には又来る二十六日の本部秋の大祭にて真柱様より教祖百二十年祭に向かう心の指針として諭達第二号を御発布頂く事になっておりますが諭達を聞かせて頂いて心を定めるのではなく前以つてよふぼく一人一人が時々のにをいがけおたすけに満足する事なく日々の生活の中で心のにをいがけおたすけを心定めさせて頂いた上で諭達を聞かせて頂きより確かな成人の歩みにさせて頂く覚悟でございます何卒親神様には旬々にお聞かせ頂く親の声を頼りにたすけ一条の成人の道を歩む皆の誠真実の心をお受け取り下さいます方たすけの上にも尚も自由の御守護を賜り親心を知らず苦しみにあえぐ人々を次々とお引き寄せ下さりお望み下さる陽気ぐらしの世の状に一日も早く立て替えて下さいますよう一同と共に慎んでお願い申し上げます



今年しや豊年穂に穂が咲いてヨ、道の小草にもコリヤ米がなるヨ。という唄がある。

唄の通り今年も又豊年万作で結構なことである。山形県の民謡「もみすり唄」に

「お米ナ、ひとつぶも粗末にするなヨ  
八十八度のヨ、チヨイト手がかかる」

又、福岡県の民謡「米ぶし」には

「米という字を分析すればヨ、八十八度の手がかかる。お米一粒粗末にならぬ、米は我らの親じゃもの」

現在の米作りは機械化され大巾に手間が省けているが、つい最近迄、一粒の米を作るのに本当に八十八回の手間がかかった。

私が一期講師の時、クラスの中に八十才位のお婆さんが居た。この人が「一粒の米の中じゃ三宝様がござる。粗末したらバチが当るでよ」と云った。初めて聞く「三宝様」という言葉だった。クラス全員で耳を傾けた。お婆さんは云った。「三宝様とはな、大水風のことじゃ」。皆んな目からウロコが落ちた思いだった。考えてみれば当たり前のことだが、あまり身近なことでは気がもかけていなかったといえる。その日以来、一粒の米も粗末にせぬように皆んなきれいに食べるようになった。特に茶髪のお姉ちゃん達は……

今年も又豊年万作で、世の中平和でアリマスな。